

## 唐長安城研究の基本的文献

辛　　徳　勇  
(中村　圭爾　訳)

### 【解題】

文部科学省「21世紀 COE プログラム」の研究拠点「都市文化創造のための人文科学的研究」(大阪市立大学大学院文学研究科)の中に設けられた研究教育チームのうち、「A: 比較都市文化史研究」チームは、大阪を中心とする日本と中国の都市の比較を進める研究活動の一環として、唐代長安の研究など、古代中国の歴史地理研究者として著名な辛徳勇氏を客員教授に招聘した。

辛徳勇氏は1959年の生まれ、哈爾濱師範大学地理系を卒業後、陝西師範大学大学院および同大学中国歴史地理研究所で学ばれ、歴史学博士の学位を取得、陝西師範大学中国歴史地理研究所の講師、助教授を経て、1992年中国社会科学院歴史研究所に遷られ、1994年研究員、同年歴史地理研究室主任、1998年より歴史研究所副所長を務められている。

辛氏は、隋唐の長安洛陽に関する歴史地理研究のほか、中国古代の交通や歴史地理関係の文献研究などに多大の業績を上げられ、『隋唐兩京叢考』(1992)『古代交通与地理文献研究』(1996)『黄河史話』(2000)『未亥齋讀書記』(2001)などの著作の他、多数の論文を公表されている。

辛氏は客員教授として本学滞在中(2003年3月7日～2003年3月23日)、2回の研究報告を実施されたが、その第2回報告では、唐長安に関する基本史料を取り上げられ、詳細な紹介と書誌学的考察、史料批判を展開された。本論文はこの報告を基に新たに書き起こされた原稿を翻訳したものである。

なお、その研究会には、唐代史研究者の立命館大学助教授松本保宣氏に参加していただき、辛氏報告に対するコメントをいただいたので、本論文とあわせて掲載する次第である。松本氏にこの場を借りてお礼申し上げたい。

(中村圭爾記)

### 要　旨

本稿は、唐代長安に関する諸文献の、著者、成書年代、内容、流傳の経過、版本とその現状、輯佚と研究の状況等について論じたものである。言及される文献は、韋述『両京新記』、宋敏求『長安志』、呂大防『長安図』、李好文『長安志図』、及びこれら以外の若干の書籍である。

韋述『両京新記』は唐開元一〇年に成了った。唐の長安と洛陽の城郭・宮殿・官署・里坊の平面配置のほか、里坊内の邸宅・寺院・市場・名勝・水路などを具体的に記録したものである。明清間に散逸したが、日本に流傳した一部分が残存し、後に中國にもたらされた。

宋敏求『長安志』は、北宋に成了った。『両京新記』の長安の部分に、その周辺地域に関する記事を加えたものである。今日流傳する最古の版本は、元代の刻本に基づく明成化四年刻本であり、次いで嘉靖一年刻本がある。清の『四庫全書』本は、

後者を底本とする。

呂大防『長安図』は、唐長安の平面配置図である。それは宋代に碑に刻されたが、原石は金末年に破壊され、拓本も残らなかった。元代に残碑が発掘され、その拓本が出現した。現在通行の長安図はこれを基にする。この他、『永樂大典』所載の図がある。

李好文『長安志図』は、『長安志』に図を補ったもので、元では合刻されていた。『四庫全書』は両者を分離しているが、それは正しくない。

キーワード：長安、両京新記、長安志、長安図、長安志図

## 一 韋述『両京新記』

『両京新記』は現存の文献中、最も古く、かつ最も系統的に唐代東西両京、すなわち長安城と洛陽城の状況を記述した書籍である。作者韋述は唐開元天宝年間の著名な史学家で、安史の乱の前に『唐朝国史』百十三巻を編纂している。

『両京新記』は、原書五巻、唐玄宗開元一〇年（七二二）に成った。この書は唐代長安城と洛陽城の城郭、宮殿、官署、里坊の平面配置の状況を詳細に記述している。周知のように、唐代長安城と洛陽城には、統一的規格のもとに、城内の居民区に整然とした里坊が建設されていたが、『両京新記』は長安洛陽城の里坊にある高官の邸宅、寺院、道觀、市場、店舗、官署、名勝、水路などの設置および分布の状況、宮城と皇城の内部配置について、具体的に記述しており、唐代長安洛陽両城を研究する際の重要な第一次史料である。

本書には、同類の書籍と比較して、両城内の里坊やその他の地点で発生した怪異な故事についてのかなり詳細な描写があるという顕著な特色がある。従来の都市建設や設計に関する研究では、このようなものは重視されなかつたが、今日から見ると、これらの内容は都市文化と都市市民の生活を研究するうえではなはだ重要な価値があり、十分に分析し利用する必要がある。

『両京新記』は成書後、大いに時人の称賛をうけ長期間にわたって通行した。『文苑英華』巻六七八蕭穎士「贈韋司業書」には、「幼い頃、足下の著書『両京新記』を拝読し、以来長く思いおこしては、まことに優れた作者であると存じ

たものでした」と述べているが、これが当時の一般的な評価とみなせよう。北宋皇祐、熙寧年間になって、宋敏求が本書を基礎に内容を増減して改訂し、『長安志』と『河南志』を著述したが、『両京新記』の主要な内容が『長安志』と『河南志』に吸収されただけでなく、この両書に『両京新記』に比してさらに多くの新しい内容が加わったことによって、『両京新記』は次第に『長安志』と『河南志』に取って代わられ、ついには中国においては失われてしまった。

『両京新記』が中国で散佚した年代に関して、從前明確な学説はない。過去の研究者はみな明人郎瑛『七修類稿』が『両京新記』を引用することに言及するが、ただ『類稿』の引用が「皆、全節を徵引するに非ず」、また単に大意を要約するだけであることから、あまり注意されないときた<sup>1)</sup>。しかし実際に関連史籍を検討してみると、清人曹元忠輯本『両京新記』は明吳道南『秘笈新書』から若干条の『新記』佚文を拾い、一九八三年発見の『永樂大典』巻三五一八「九真韵」門制類下はあきらかに韋述『両京新記』の内容を引用しているし、胡震亨『唐音發籤』巻三七『談叢』三も『両京新記』等から抄録した当時の帝王と臣下の唱和篇目のことについて言及している。これらの状況は、『両京新記』が明代なお流伝していたことの証左であるが、清乾隆年間の『四庫全書総目提要』纂修時には、この書は「久しく已に亡佚」（『長安志』条）したとされており、かくて『両京新記』は中国国内ではおむね明清間に散佚したとができる。

中国では明清間に失われてしまった『両京新記』だが、幸いなことにその一部分の残巻が日

本で流伝した。これは日本で保持された数多くの中国典籍のなかでも特に重要な一書であり、私は一人の歴史地理学者として、日本の人々に特段の感謝の意を表すものである。

日本寛平中に成った『日本国見在書目録』の著録に拠れば、韋述の『両京新記』は遅くともすでに唐末には日本に伝来していた。ただし、『両京新記』原本は五巻であるが、『日本国見在書目録』はただ四巻を著録するのみで、すでに足本ではない。しかも、この四巻の残巻は日本では流伝することなく、日本において今日に流傳するのは尊經閣所蔵の金沢文庫本である。これは残欠した節略文の写本であり、鎌倉初期に書写されたもので、わずかに原写本の巻三の大部分を残しているだけとはいえ、きわめて貴重なものである。その残存部分の内容は西京、すなわち長安城の里坊の一部に関するもので、史料価値は隋唐長安城研究に限られる。日本寛政、文化年間、天澤山人林述齋が『佚存叢書』を刊行した際、伝抄の「写金沢文庫本」を根拠に、この残巻を叢書に収録した。かくて『両京新記』はふたたび中国にもどったのである。

中国に回帰後、『佚存叢書』本『両京新記』残巻は前後して『鶴雅堂叢書』と『正覺樓叢書』に収められ、光緒年間には上海黃氏の木活字排印本が出された。民国になって、商務印書館影印の『佚存叢書』本と『叢書集成』本が出た。これらの版本はみな『佚存叢書』本から出ているが、『佚存叢書』は一に伝抄においてすこぶる誤りが多く、二に『金沢文庫』本は元来卷子本で、卷子の排列に乱れがあるのに、『佚存叢書』は刊行時に校訂を経なかったため、その中に重大な錯簡と大量の誤りがある。上述の『佚存叢書』から出た諸本は『佚存叢書』本に対して多少の訂正是行っているが、それには大きな限界がある。

一九三六年、両種の校訂本が同時に刊行された。一は周叔迦が日本で発表した「訂正『両京新記』」<sup>2)</sup>であり、一は中国における所謂「西京籌備委員会」が鉛印した陳子怡著『校正『両京新記』』である。この二校本は大同小異で、主には『佚存叢書』本の錯簡に訂正をほどこしたものであり、基本的には『佚存叢書』の大部分の錯簡を改正したが、依然として個別の誤りは存

在した。

一九四〇年代、岑仲勉は『両京新記』に対して、全面的な復原作業を実施した。一九四七年、かれは前国立中央研究院『歴史語言研究所集刊』第九本に『両京新記』巻三残巻復原」を公刊した。岑仲勉の校訂作業は多大の労力を費やし、多くの関連文献を参照した、『佚存叢書』本に基づいた最良の校本というべきであり、周叔迦や陳子怡の校本をはるかに超えている。ただ、周校本は日本で刊行され、陳校本は西安という地方で刊行されたものであり、かつ当時は戦乱の時期であったため、岑仲勉は周、陳両校本を見ることができず、相當に重要な錯簡を訂正できなかつた箇所が文中に若干あり、それらの部分では周、陳両校本に及ばない。ともあれ、周叔迦、陳子怡、岑仲勉三者は多大の精力を費やして『両京新記』を校訂したのだが、そもそも底本の『佚存叢書』本の誤りが重大であるので、なお多くの問題が未解決のままであった。

一九五三年、日本学者福山敏男は尊經閣蔵金沢文庫卷子本を底本に、『両京新記』残巻に全面的な校訂と復原作業をおこなった。福山敏男の作業には三方面にわたる内容がある。

- (一) 卷子本の排列と接合の順序を革新し、全体の錯簡を解消した。
- (二) 原書が言及する名物や典故に詳細な注釈をつけた。
- (三) 原書の文字に対して信頼すべき校訂をおこなった。

福山敏男は造詣の深い学者であり、また原本の卷子本を利用し得たので、その「校注『両京新記』巻第三」<sup>3)</sup>は、現在国内外最良の校本である。日本では早く一九三四年『両京新記』残巻を影印複製し、日本学者はその利用に便であったが、伝写の過程で多大の誤りがあった。地理書の文字の誤りは、他の史籍に比して、内容に対する影響が往々にして甚大である<sup>4)</sup>。それとともに、卷子本原巻には接合の順序に関する錯簡問題があり、専門に長安城を研究する学者以外は、よく整理された校本を利用するのが適切である。

日本より回帰したこの第三巻節略本以外に、光緒三十一年（一九〇五）、曹元忠は『佚存叢書』本を基にして『両京新記』全体の輯本をつくり、

『南青札記』に収めた。この輯本に収められた佚文は広範囲から収集されているが、校訂作業がかなり粗雑であるのは当時の事情によろう。

日本学者平岡武夫も後『両京新記』統拾を著し、あらたに若干の佚文を集めて『唐代の長安と洛陽』資料篇（一九五六）に収めた。しかし、詳しい事情は不明だが、『両京新記』統拾は曹元忠輯本にすでに収められてある佚文を重複して収め、かつ『説郛』から佚文三条を採っているが、これは誤取というべきである。

この三条は涵芬樓本『説郛』卷四にあり、『西京雜記』と題されている。『説郛』は『西京雜記』の題で六条を収めるが、どうしたことか平岡武夫はその中の三条のみを選んでいるのである。この六条中、第二条は「李藩が入って相となる」一事に言及するが、李藩が相となったのは憲宗朝のこと、開元一〇年に成った『両京新記』に載るはずがないことは明かである。これは『説郛』所引の『西京雜記』が韋述の『両京新記』とまったく関係がないことを証するもので、それは別種の著作にちがいない。

『説郛』所収の『西京雜記』六条は、いずれも南宋曾慥『類說』にみえる。その二条を『類說』は『両京雜記』と作り、四条を『秦京雜記』と作る。いわゆる『両京雜記』二条中、一条は上述の「李藩」の事であり、別の一條「佛袍集」は牛僧孺に関する事に言及する。明らかにこの『両京雜記』の成立時期は、韋述『両京新記』よりはるか後のことである。『類說』所収の『秦京雜記』のうち、「陂」の条には「陂以魚美得名」とあるが、宋呉曾『能改齋漫錄』卷六「陂」条には、「唐元澄撰秦京雜記には、陂以魚美得名と載す」とあり、『類說』所引のものは元澄撰『秦京雜記』である。それゆえ陶宗儀『説郛』は實際は韋述『両京新記』を採録していないのである。『説郛』所引『西京雜記』は撰人不詳の『両京雜記』と元澄『秦京雜記』から抄録したものであるはずで、文章から見て『類說』から抄出した可能性が高い。

福山敏男校注本は、現在『両京新記』残巻を使用した最良の版本であるが、その校勘作業には若干の疎漏やなお検討すべきところがあり、注釈は歴史を専門とする研究者からいえばかなり煩瑣に過ぎる。また、かれの作業は残巻の整

理に限定されていて、佚文の輯校にまで手が及んでいない。『両京新記』全体の整理作業からいえば、明らかに不完全なものである。

かかる状況に鑑みて、一九八九年、私は先学の研究を基礎にして、新輯校本の編纂を試み、現在集めうる限りの佚文と残巻第三巻写本をひとつに編んでみた。私の輯佚作業は曹元忠と平岡武夫の輯本を基礎にし、若干のあらたに見出した佚文を加えたものである。残巻第三巻部分は福山敏男校本を底本とし、その他の佚文は、『秘笈新書』が当時校対に不便であったので、曹元忠輯本を転録したほかは、みないいちいち原文にあたり、依るところの書籍も可能な限り現在通行の良好な版本を用いた。同時に、関連文献を調査して、あらためて全面的に校勘も行ったものである。

私のこの輯校本の巻次は、原書に依拠して五巻とし、具体的な各巻の区分はおおむね福山敏男の見解に依りつつ、若干変更してある。残巻第三巻の書写形式に拠れば、『両京新記』原書は大字の正文と小字双行の自注に分かれている。今回の輯校では、残巻第三巻の状況を参照し、すべての佚文を大小字に区別して排列した。そのほかにも、この輯校本では『長安志』等の書を参照して各条の佚文の順序を細かく排列するという作業もおこなった。佚文排列の方式では、現在の一般的な方法とやや異なるところがある。それは、出處が異なり文字にも優劣のある同一条文を並列せず、そのうちの善いもの一條を選択し、もしそれ以外の出典の同一条文で校補に利用できる箇所があるものは、校勘の説明をつけたり、関連の箇所をきりとて正文に加え、かつその出所をいちいち注記したという点である。このように処理した箇所は輯校本の読みやすさを増し、査閲に便利である。また各条ごとにその下に明確に典拠を表示したことも、研究を進めるうえでの需要にこたえるものであろう。本格的な専門研究の立場からいえば、伝統的方式に従い同内容の条文を羅列しても、史料として用いる場合は原典を確認する必要があるからである。

福山敏男は『両京新記』残巻第三巻太平坊舒王元名宅条の「今為戸部尚書尹思貞居之」という記事と、『太平御覽』卷一八〇引く『両京新記』

明教坊開府宋璟宅条を根拠に、『両京新記』に出る最も後の年代は開元八年であるとして、『玉海』が『両京新記』の成立年代を開元一〇年とするのを確認した。この見解はきわめて正確である。ただし、『両京新記』に出る最も遅い年代は、開元八年ではなく、開元九年である。残巻第三卷光徳坊京兆府廨条下に載せる京兆尹孟溫礼が府廨を修理した記事は、福山敏男校本では開元元年に作るが、『冊府元龜』卷一五九では孟溫礼が京兆尹に任じられたのは開元九年であり、また陝西省高陵県で近年出土した唐開元九年達奚珣撰の「東渭橋記」碑殘石には、この橋がこの年「京兆孟公」の指導で修築されたと述べており、孟溫礼が京兆尹の任にあったのは開元九年であったことが証明できる。『新記』残巻の「元年」は「九年」の誤りであるとせねばならない。また、義寧坊化度寺条に、福山本には開元元年、勅令して三階教無尽藏を破壊した記事があるが、『冊府元龜』卷一五九によれば、唐玄宗が詔を下して化度寺無尽藏を廃棄したのは開元九年であり、その詔書中には京兆尹孟溫礼に言及している。したがってこの「元年」もまた「九年」の誤りである。この二条は福山敏男の結論を補完することになる。

拙著輯校本は本来、陝西三秦出版社の『古長安叢書』に収められることになっていたが、その後事情があつて出版できなかつた。最近三秦出版社はまた一連の西安地方の歴史文献の出版を計画しており、拙著もその中に収められる計画となつてゐる。これが早く出版され、隋唐長安城および洛陽城の研究に寄与することになり、同時に学術界の批評を得ることができるよう願うものである。

## 二 宋敏求『長安志』

宋敏求は北宋の著名な学者であり、伝世の重要な唐史研究の典籍である『唐大詔令集』の編者でもある。『長安志』は韋述『両京新記』に基づいて、長安城およびその周辺の地域の状況を記述した地理書である。ほぼ同時にかれは『両京新記』をもとに『河南志』を著述し、洛陽地区の状況を記したが、これは早く失われてしまつた。

唐代長安城の状況が、『長安志』の中心的内容である。宋敏求は『両京新記』を基礎に、以下三方面の作業を行つた。

- (一) 『両京新記』中の怪異な記事を削除した。
- (二) 開元一〇年以後の都市建設内容を増加し、それ以前については関連する内容を増補した。
- (三) 書物の体例上、『両京新記』のごとき都市志ではなく、唐京兆地区を記述対象とする地域志となり、唐長安城周辺の京兆地区に関する内容を大量に含むことになった。

このような事情で、普通に唐長安城の状況について読んだり理解したりする点では、『長安志』がほとんど『両京新記』に取って代わることになった。これが後世『両京新記』が中国で失われた主な原因である。しかし、今日の研究の点からいえば、『両京新記』の役割は他書にはけつして取って代わることができないものである。

『長安志』は基本的には完全な形で流傳したが、それでも重大な誤りがあり、訂正が必要である。たとえば、唐長安城の外郭城の里坊部分は、朱雀門外以東の城東南角から朱雀門外以西の第一街の先頭部分までの両坊の間で、錯乱と遺漏があり、それがきわめて深刻であるため、長安城の外郭城の里坊の復元作業に重大な影響を及ぼしている。したがって、『長安志』を用いて唐長安城を研究する際には、『長安志』の版本の流傳状況について了解しておくのがよい。それは、古代地理の研究者が『水經注』を利用するのに、まずその版本の源流を了解しなければならないとの同様のものごとである。

周知のように、一般的にいえば、歴史典籍は刊刻年代が古ければ古いほど、流傳過程で生じる文字の誤りの可能性は少なくなる。古籍版本といえば、宋元刻本を最重要視するが、『長安志』は北宋に成ったとはいえ、流傳する宋元刻本はない。

現在見ることのできる最古の『長安志』伝本は、明成化四年（一四六八）の陝西部陽書堂刻本である。われわれはいまこれを「成化本」と呼ぶ。この刻本は現在二部が伝世していることが知られている。一は明末の蔵書家、有名な『千

頃堂書目』の著者黄虞稷の旧蔵本で、他の一は清代中期の著名な藏書家黃丕烈の旧蔵本であり、現在ともに中国国家図書館善本部に収蔵されている。この二件の成化本は印刷が比較的晩期のもので、成化四年の刻版後直ちに刷られた書籍ではなく、版刻完成後長年たって、本書木版によって多数部数を印刷した後でようやく刷られたものであり、したがって木版が摩滅、破損しているため、ある部分は文字がよく分からなくなっている。さらに深刻なのは、両書にそれぞれの部分で欠葉があることだが、両者の欠葉がまったく同一でないので、互いに補充しあえる。成化本『長安志』は、宋敏求の原書の他、元代の李好文編纂の『長安志図』を附して刊刻した。『長安志図』を『長安志』といっしょに刊刻するこのような方法は、後の伝世刻本の踏襲するところとなった。現在知るところでは、『四庫全書』写本だけが両者を分けている。後に言及するが、これは『四庫全書』を纂修した四庫館臣が故意になしたこと、その方式は不正確である。

成化本の後、嘉靖十一年（一五三二）、当時の西安知府李經は、西安において主導して『長安志』を刊刻した。現在私が知るところでは、中国国家図書館、中国科学院図書館、上海図書館はいずれもこれを収蔵しており、アメリカ国会図書館と吉林大学図書館には不完全な残本がある。われわれはこれを「嘉靖本」と称する。

嘉靖本と成化本は大同小異である。ただ現存の二部の成化本はともに『長安志図』巻下「涇渠図説」の「渠堰因革」の首葉を失っているが、嘉靖本は完全で欠葉がない。この点で、嘉靖本は成化本よりもよいとせねばならない。ただこの他は、伝世の嘉靖本は欠葉が多く、十数部所に達する。私が目睹した数部の嘉靖本の状況から見て、各種の伝本の欠葉の様子はみな異なり、往々にして食い違いがある。この他、嘉靖本が成化本の不鮮明な部分を補充訂正し得ることを除けば、全体を見て、現在に流传した成化本は、嘉靖本に比して完善であるところが多い。

成化本と嘉靖本の内容を比較すると、両者に密接な関係のあることがよくわかる。第一に、両者は明白にしてかつてたらめな誤りを共有する。たとえば、「右扶風」を「后扶風」と作り、

「漢中」を「漢三」と作っている。第二に、両者には共通した残欠部分が多くある。第三に、両者には共通の明白な錯簡と誤りがある。これらは両者が同一の誤りをもつ底本に拠ったか、もしくは両者の一方が源流であるという関係があることを示している。この両刻本の「行款」（文字の順序や行の形式）からは、両者が同一の元刻本を底本にして刊刻された可能性が強いことを推測できる。それは同時に附刻された『長安志図』の成化、嘉靖両刻本が、ともに「聖朝」「聖旨」「国家」の字に行き当たるところで一律に「提行」（改行）するからであり、いうまでもなくこれは元刻本の様式を踏襲した結果だからである。

清朝刊刻の『長安志』には、乾隆四九年（一七八四）の畢沅墨山館校刊本があるだけで、われわれはここではこれを畢刻本と称することにする。畢刻本はこれまで唯一の「通行本」であり、研究者にとっては非常に大きな影響があった。後に畢沅が刻した『經訓堂叢書』に収められ、王鳴盛が乾隆五二年（一七八七）に書いた序が添えられたので、「經訓堂本」ともいう。民国ではこの版本を底本にした鉛印本が出されたが、これがいわゆる『閔中叢書』本である。

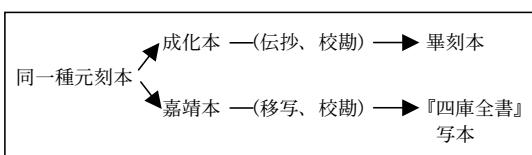
畢沅がこの書を校刻したのは、かれが陝西巡撫であった時で、畢刻本は実際はかれの幕下の孫星衍らが校刊したものである<sup>5)</sup>。畢刻本は刊行の過程で残念な点が二つあった。その一是底本がよくなかったことである。当時、成化本、嘉靖本いずれもまれで入手しがたく、畢刻本はこれを底本にできなかった。その底本は成化本から何度も抄録が繰り返された「伝抄本」であり、伝抄の過程で少なからぬ誤りを生じていた。その二是、孫星衍はたいへん水準の高い学者であるが、本書を校刊した際にはかならずしも力を尽くさず、また畢沅を適当にあしらったので、作業は粗雑で、結果もはかばかしくなかった。

清代で注意すべき版本は、『四庫全書』本である。その形式上の最大の特徴は、『長安志』と『長安志図』を分離し、単独で著録したことである。拠った底本は嘉靖本であり、畢刻本が成化本を底本としたことと異なる。従来の学者は『四庫全書』写本に対して高い評価を与えず、原書を

恣意的に改め、纂修のなかで本来のすがたを失わせたとみなす。この見方はもとより誤りでない。しかし、別の方面からいえば、四庫館臣は一部書籍についてはたいへんな力を注いで校勘をしている。『長安志』についてはこのことがあてはまる。『四庫全書』本は、校勘に関しては畢刻本に勝る部分が数多くあり、水準は高い。しかし、『四庫全書』の体例に妨げられ、現在われわれはかれらの校勘の具体的な根拠を明確にすることはできない。

清代には、さらに多くの抄本が流傳した。そのあるものは名家の収藏した抄本であるが、だいたいは直接か間接に成化本から出たもので、嘉靖本から出たものも個々にはあるが、基本的には校勘学上の価値はない。ここで私がとくに言及したいのは、現在日本の静嘉堂文庫所蔵の朱彝尊潛采堂旧蔵の清抄本である。この抄本は実際は間接的に成化本から出た伝抄本なのだが、しかしこれまで蔵書家からは誤って、作られた当時は元代の刻本を抄写した版本であるとされており、題には「影元抄」の三文字がある。周知のように静嘉堂文庫の中国典籍は清朝の蔵書家陸心源の皕宋樓の蔵書を買ったものである。『皕宋樓藏書志』がこの書を「影写元刻本」と著録しているのも誤りである。もし成化本の閲覧が不便な場合、当然この本を利用することができますが、ただ特別な校勘上の価値はない。

以上に述べた『長安志』の主要な版本の源流関係を図示すれば次のようになる。



### 三 呂大防『長安図』と李好文『長安志図』

『長安志』が成ってわずか三年後、北宋永興軍知府呂大防が中心となって、唐代長安城の平面配置の状況を示した地図、すなわち『長安図』が作られた。

これより前、ほとんど同じ内容の地図が描かれたことがあったと、北宋の宋敏求は『長安志』

のなかで述べている。その地図はおおむね唐宣宗朝から北宋初年にかけての時期に成了ったが、その詳細な事情はもはや求めるすべもない。

呂大防が描く『長安図』のおもな根拠はほかでもなくこの旧図と、韋述の『両京新記』であり、これ以外にも他の書籍を参考にし、また現地の遺跡を考察してある。この地図は唐長安城、大明宮および付近の山川古蹟を包括した総図と、太極、大明、興慶三宮殿を含んだ宮殿図から成っており、元豐三年（一〇八〇）に刻碑したもので、かなり詳しい題記が附刻されてある。つまり、すべては三つの部分から成っているのである。『通志』図譜略はそれぞれ呂大防『唐長安京城図』、『唐太極宮、唐大明宮、唐興慶宮図』とわけて著録しており、『直齋書録解題』と『玉海』はいずれも呂大防『長安図記』と著録する。これはこの三部分の内容がそれぞれ単独で流傳したからにちがいない。当時は拓本や拓本から転写、移録した本を根拠にして著録したはずである。

残念ながら、拓本全本がいまに伝わらないのみならず、原碑もまた金朝末年、元朝軍の閨中侵攻時に破壊されてしまった。

元憲宗二年（一二五二）、雷徳元らは旧碑の拓本を探し出し、修訂した後、『長安志』の後に附し、『長安志』とともに刊行した。上述のように、元代刻本『長安志』は流傳せず、したがって、『長安志』の後に附された呂大防『長安図』元刻本もまた流傳していない。

清朝末年になって、呂大防『長安図』の一部の破片残碑が掘り出され、骨董市場に流出した。これにしたがってこの部分の残碑拓本も現れた。日本人前田真典は西安で目録学家邵章旧蔵の拓片を購入した。これは二個の残石から成るものであったが、惜しいことに一九四五年、日本で戦火に焼かれてしまった。中国のその他の拓片はすべて亡佚してしまい、原碑残石も僅か二個しか残らなかったが、それはいま西安碑林に置かれている。幸いなことに、前田真典は入手した拓片を一九三九年出版の『東京城』に収め、平岡武夫はこれを利用して摸本を作り、『長安と洛陽』の「地図篇」として刊行した。これはわれわれが通常見かける呂大防『長安図』の最大内容である。この他、その題記部分は基

本的には完全で、それぞれ南宋趙彥衛『雲麓漫抄』と李好文『長安志図』そのものの中に收められている。平岡武夫と福山敏男は、ともに題記の復原では良い業績をあげたが、なお若干の検討を進めるべきところが残っている。

以上に述べたのは原石拓片の状況である。しかし実はこれら残して不完全な拓本以外に、呂大防『長安図』の南宋秘書省蔵本、「閣本」または「閣図」と称するものがあり、この系統から出た多大の内容が流伝しているのである。これには三つの系統がある。

(一)『永楽大典』所収のもの。これには少なくとも三幅あることが知られている。すなわち「閣本太極宮図」、「閣本大明宮図」、「閣本興慶宮図」である。これらはおそらく原碑の宮殿図から分かれてきたものに違いない。清嘉慶年間、徐松はこれらを『永楽大典』から抄出した。このうち前二者は現在中国国家図書館に所蔵されているが、「興慶宮図」は行方不明である。

(二)『雍録』は主たる内容を転載している。  
(三)元朝人胡三省の『資治通鑑』注はかなり多くの内容を引用している。

この他にも、『長安志図』中に、呂大防『長安図』を主要な根拠として模写した部分がある。

元朝人李好文の手になる『長安志図』は、その最初は宋敏求『長安志』に地図がないところを補わんとしたものである。清朝四庫館臣は『長安志図』と『長安志』には直接の関係はないと考え、その両者を合刻せず、したがって『四庫全書』が著録する際、それらを分けたのである。この見解はまったくの誤りである。なぜなら李好文はその序言で、自らの著作の目的について明瞭な叙述をおこなっているし、また伝世の版本の状況から見て、『長安志図』が元代に最初に刊刻された際、李好文自身がそれを宋敏求『長安志』と合刻したのであり、これが他でもなく、前述の成化本と嘉靖本『長安志』両刻本が依拠した祖本なのである。

しかし、『長安志図』の内容は、わずかに『長安志』の附図としてのそれに限定されるものではなく、唐長安城の研究において、多くの独特的の価値を有しているのである。

#### 四 その他数種の重要文献

##### 1 南宋程大昌『雍録』

『雍録』は漢唐長安城研究のたいへん重要な基本的文献である。ただし、本書を利用するに際して注意すべきであるのは、本書と宋敏求『長安志』のような叙述的性格の書との差である。ただ成書年代が早いというだけで、われわれは本書の叙述的価値を十分に利用することはできるのだが、しかし本書は実は考証的書物に属するのであって、その体裁は全体が叙述ではなくて、若干の考証すべきことがらをもっぱら考証補訂したものである。宋代の考証学者の著述の中で、本書は相当に高い水準の代表的著作である。

##### 2 元駱天驥『類編長安志』

作者の駱天驥は元代の長安その土地（当時は奉元路と称した）の儒学教授であり、学術水準は低く、本書はただ宋敏求『長安志』を分類して編集し、さらに一部金元代の事情を増加したものにすぎず、文化的に低水準の読者の読書に供したものである。本書の唐代長安城研究における価値は、おもには成書年代が早く、『長安志』本来の内容、たとえば坊名や門名をいくらか残している点であり、これをを利用して今本『長安志』の多くの遺漏や誤りを校正補訂できるのである。本書は從来伝伝が少なく、ただ少数の抄本が世に行われるにすぎず、目睹が容易ではなかった。それは清人が『四庫全書』を編集した際に搜集できなかつたほどであり、学術界もこれを十分には利用できなかつた。最近、中華書局が点校本を出版し、はじめて研究者の利用に便利となつた。

##### 3 元王士点『禁扁』

『禁扁』は歴代宮殿の構成部分の名称、たとえば殿名、閣名、門名、楼名などを分類編集したものである。これまた成書年代が早いという点で、関連内容の校訂に助けとなる。通行本には清の曹寅『棟亭叢書十二種』刻本、および民国時期に古書流通処がそれを影印したものがあるだけである。

4 清徐松『唐兩京城坊考』

本書は徐松が『長安志』をもとに、唐代の各種文献を搜集し、唐長安城に関する内容を増補羅列したものである。従来本書に対する評価は極めて高く、現代の学者は通常これを第一次史料と同様にみなしている。これは同類の清人著作では稀なことである。しかし実はこれは正常のことではないのであり、これは一般人がこの種の内容を読むのに、原典の内容が煩雑で、査閲が面倒であるとの関係があるのかもしれない。

本書の主な欠点は、用いた『長安志』の版本が善くなく、通行本『長安志』の多くの重要な誤りを踏襲していることと、「考」と名づけているとはい、じつはただ記事をならべただけで、基本的には考訂ではなく、したがって信用しがたい部分が多く存在することである。いまでは、閻文儒、楊鴻勛、李健超、愛宕元など、多数の学者が史料を増補したり、注釈を施したりしている。ただ考訂作業はなお普遍的には行われて

おらず、機会があればあらたに訂正本を作成して、研究者の利用に供するべきである。

注

1. 岑仲勉「『兩京新記』卷三殘卷復原」（『中央研究院歷史語言研究所集刊』九、一九四七）
2. 周叔迦『服部先生古稀祝賀記念論文集』（富山房、一九三六）
3. 『美術研究』第一七〇号、一九五三。後同氏『福山敏男著作集』第六、『中国建築と金石文字の研究』（中央公論美術出版、一九八三）に再録。
4. たとえば『水經注』流傳過程における文字の誤りは、清代地理学と校勘学の重要な研究内容であった。
5. 門客を養ってみずからのために書籍を編集印刷したり、校勘したりするのは、清代の辺境に任じられた高官がよく行った方法で、阮元の『十三經注疏』もその種のものである。

## Principal Historical Sources on Chang-an in the Tang Dynasty

Deyong XIN

(translated by Keiji NAKAMURA)

The thesis deals with several aspects such as the authors, issue dates, subject matter, circulation progress, texts and their condition, and collation work of lost literature and also the current research in literatures as well of principal historical sources on Chang-an in the Tang Dynasty; Wei Shu's *Liang Jing Xin Ji*, Song Minqiu's *Chang An Zhi*, Lü Dafang's *Chang An Tu* and Li Haowen's *Chang An Zhi Tu*.

**Keywords :** Chang-an, Liang Jing Xin Ji, Chang An Zhi, Chang An Tu,  
Chang An Zhi Tu